豊田有恒

アドベンチャー明治元年

トベンチャー明治元年

豊田有恒

角川書店

アドベンチャー明治元年　　豊田有恒

1978年10月30日　初版発行

発行者　角川春樹　　発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見2―13―3
電　話　　(03)265-7111(大代表)
郵便番号102　振替 東京3-195208
印刷所 東洋印刷株式会社　製本所 株式会社鈴木製本所
Printed in Japan　　0093-872229-0946(0)

目次

アドベンチャー明治元年……三
異次元航路……三九
トンネルを抜けると……九七
ルーツ探し……一三五
虚空の柩……一五一
最後の楽園……一七三
もののけ……二三一
あとがき……二三七

装丁　和田　誠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

アドベンチャー明治元年

1

矢吹兵馬は、船の艫に坐りこみ、大刀を抱えたまま、身じろぎもしなかった。

海は凪いでいる。マストには、鷗が舞っている。平穏な日和である。

六百八十トンの汽船チャイナ号は、つつがなく航海を続けてきた。その船尾から後方にむけて、太いロープが延び、その先に小型船が牽かれている。六十トンの小蒸気船グレタ号である。

甲板の水夫たちの動きが、あわただしくなった。色の浅黒いフィリピン人、弁髪をたらした中国人に入りまじって、水夫長の白人もいる。

「ヘイ、ユウ！」

矢吹は、だしぬけに、呼びかけられた。うるさそうに見上げると、六尺ゆたかな異人が立っていた。この船団の隊長オッペルトという男である。潮風に金髪をなびかせ、巌のように立ちはだかっている。

「何か用か？」

矢吹は、日本語で訊きかえした。すると、白人は、矢吹の大刀を指さして、言った。

「サムライ・ソード。プシッ」

プシッという擬音は、人を斬れということなのだろう。なぜなら、矢吹は、その目的のために、雇われている。

矢吹が、刀を左手にもちかえ、のそりと立ちあがると、白人は、二、三歩さがった。上海で、誰か

から、その刀の威力について、じゅうぶん教えられているらしい。

上海で十四年間はたらいて、小金をためて帰国する途中、横浜へたちよったリチャードスンという男が、サムライ刀で斬りつけられて殺されたのは、わずか数年前のことである。その噂は、上海の租界では、有名になった。この男のほかにも、日本人に斬られて死んだヨーロッパ人は、何十人にものぼる。

矢吹は、この船の上で、自分が恐れられていることを知っている。

「よかろう、敵が現われたら、この太刀で斬りすてろというのだな」

矢吹が、大刀を引きつけてみせると、オッペルトは、ゆっくりさがり、警戒の身ぶりを示しながら、あとずさりした。

白人の隊長が去ると、背の低い猪首の男がやってきた。耶蘇教の伴天連で、フェロンというフランス人である。そのうしろには、三人の東洋人が従っている。朝鮮人の耶蘇教徒である。

矢吹と乗組員との会話は、三人の朝鮮人とのあいだで、漢文の筆談によって行なわれる。今日もまた、なにか話したいことが、あるとみえる。フェロン神父は、筆談の通訳を連れて、矢吹のところへやってきたのである。

矢吹は、矢立てをとりだして、いつものように筆談をはじめようとした。そのとき、舳のほうで、歓声が沸きおこった。

行手の左右に、陸地がせばまってきている。緑の沃野が、左右から海に溺れこむようにして、連なっている。山影は見あたらない。肥沃な平野が、拡がっている。

朝鮮の陸地なのだ。矢吹は、艫に立ち、まわりを見まわした。この船上からも、はっきり見える。水田地帯になっているのである。

矢吹は、ふと、心のなごむのを覚えた。この緑野を見ていると、ふしぎに心が安まる。上海の租界は、小さな欧州のようで、どうしてもなじめなかった。鴉片快速船と呼ばれる船で鴉片を運びこみ、一代で財をなしたデント商会は、南欧風の豪邸で、別荘建築のような露台までついている。蘇州河の北にあるアメリカ租界にも、たくさんの建物がある。なかでも、エピスコパル教会は、耶蘇教の東方伝道の根拠地ともいえる。

矢吹兵馬は、高杉晋作とともに上海に渡り、藩命によってそのまま残留した。英語の片言なども、今では多少は判るようになっている。

矢吹は、いま、ここで、奇妙な感動を覚えた。なぜならば、欧米人に蚕食された上海と比べて、初めて目にする朝鮮の大地は、かれの故郷の長州を彷彿とさせたからである。

「プリンス・ジェローム湾！」

フェロン神父が叫んだ。このフランス人は、李朝のもとで耶蘇教布教につとめていたが、大院君の弾圧にあって、国外に脱出した。当時、布教にあたっていた宣教師十二人のうち九人までが捕えられて殉教している。神父が、遠征隊に同行して、朝鮮に戻ってきたのは、ひたすら復讐のためであった。

プリンス・ジェローム湾――今日の忠清南道の牙山湾である。朝鮮半島の西海岸、仁川から、無数の島々のあいだを縫って、五十キロほど南南東にくだったところにある。湾口は二つの陸地で扼され、

かなり狭まっているが、湾内は、かなり広い。

チャイナ号は、微速を保ったまま、湾口に入りこんでいく。京師ソウルを控えた仁川あたりでは、水軍の警戒も厳しいが、このあたりでは、軍船の姿は見かけない。

緊張した甲板に、なごやかな空気が戻ってきた。フィリピン人の雇い兵は、舷側にもたれて、ミニエー銃を手にして、射撃位置についている。だが、間近に見える陸地には、朝鮮の兵士の姿は、見あたらない。それどころか、里人の姿が群れている。白衣を着た子連れの人たちが、この見慣れない船にむかって、手を振っている。すこしも、警戒していないのである。

矢吹兵馬は、敵意を示さない里人に、なぜか親しみを覚えた。

上海では、「隠者の国」朝鮮は、人々の関心を集めていた。東アジアに残された唯一の「未知の土地」だからである。この国を開国させることが、各国の競争になっている。ヨーロッパ諸国は、競って朝鮮をめざした。東アジアにおいて、中国のほかに橋頭堡を設けることが、時代の要請となっている。従って、開国は、かなり乱暴な方法で、強行されようとしていた。

一八六六年（慶応二年）、七隻のフランス艦隊が、江華島に押しよせた。フェロン神父は、その水先案内をつとめている。宣教師の虐殺と、その報復のための出兵という、よくある植民地主義の侵略パターンである。これに対して、朝鮮王朝の執政大院君は、攘夷を敢行した。

矢吹兵馬の属する長州藩も、四年前、馬関（下関）において、攘夷を断行しているが、四か国艦隊の艦砲射撃によって、無惨な敗北に終った。このあと幕府による長州征伐が行なわれ、長州藩は、窮地に陥り、もはや、攘夷どころではなくなった。

大院君の攘夷は、これとは違った方法をとり、しかも、成功した。フランス艦隊は、長州戦争で味をしめ、同じ戦法にでた。艦砲射撃で砲台を沈黙させ、陸戦隊を上陸させるという戦術である。これに対して、大院君は、風変りな命令を発した。全国から、八百人の虎射ちの猟師を集めたのである。朝鮮各地には、虎手といわれる虎狩りのベテランが沢山いる。朝鮮虎――ティグリス・コレエンシスは、獰猛な野獣である。一発必中で殺さなければ、虎手のほうが食われてしまう。朝鮮側は、正規兵の代りに徴集した虎手を、フランス侵略軍にあたらせた。武器は旧式な火縄銃でも、狙撃兵としては、うってつけである。

緒戦の勝利におごったフランス兵は、江華島の内部に侵攻した。ところが、どことも判らぬところから狙撃され、一人また一人と斃されていく。確かに敏捷な虎よりも、人間のほうが、射ちやすい標的である。とうとう、フランス陸戦隊は、パニック状態になって、海岸に逃げかえった。このときの侵略は、完全な失敗におわる。

当時の朝鮮は、鎖国していたにはちがいないが、理由のいかんにかかわらず、外国船を打払ったわけではなかった。フランス艦隊の侵入と同じ年、難破したアメリカ船サープライズ号の乗組員は、親切に救助され、鴨緑江をこえて中国へ送られ、無事に帰国している。

ところが、そのアメリカのジェネラル・シャーマン号は、強引に平壌に接近し、大同江を遡りはじめる。明らかな挑発である。朝鮮側が応戦したのは、アメリカ側が上陸し、官吏を人質にとったり、掠奪をはじめたりしてからのことである。朝鮮側の戦術は、またしても、東洋的な奇策だった。今度は、虎手のかわりに、薪をつんだ筏が集められた。筏に火をつけて河上から流すと、あっというまに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

シャーマン号は炎上した。

いま、牙山湾に入りこんだチャイナ号の上層部は、そういった成行を承知している。朝鮮は、日本と違って、手強い国である。

日本は、黒船をさしむけただけで、あっけなく開国した。残りの攘夷派も、長州と薩摩が、欧米と二度たたかって敗れると、欧米のテクノロジーを学ぶ方向に、急転直下に変ってしまった。

ところが、朝鮮は、頑固である。日本と違って、実際に攘夷を敢行して、しかも成功している。この国を開国させるのは、容易ではない。

上海の欧米諸国の租界で、朝鮮開国が急がれる理由が、別にあった。せっかく開港させた日本が、幕末の政情不安に陥り、薪炭、水、食糧の供給基地としての役割を、果たせなくなりかけている。日本以外に前進基地を設けなければならない。

こうした要請にもとづいて、隠者の国への関心が、俄かにたかまったのである。

だが、現実には、どうすれば、朝鮮一番乗りが可能かが、問題である。帝国主義レースの第一走者フランスは、艦隊を繰りだして武力を行使し、しかも敗退している。第二走者のアメリカも、同じ方法で、やはり失敗している。

矢吹は、滞在する上海で、欧米列強の動きを、よく観察している。ここで、日本の武士は、朝鮮について、はじめて関心を持った。

考えてみると、隣国朝鮮のことは、日本には、奇妙に知られていないのである。毛利氏の支配する以前に、防長二国に覇を唱えた大内氏は、朝鮮の百済の聖明王の裔と称している。また、朝鮮は、日

本へ友好使節を送ってきている。この朝鮮通信使は、文化八年（一八一一）を最後に中断しているが、矢吹自身、その盛大な供揃えのことを、古老から聞いたことがある。

長州藩内で、朝鮮使が寄港する場所は、二か所ある。はじめは、下関である。そこから千余隻の大船団で出港する。先導の対馬藩の船ばかりでなく、通信使の船および、長州藩の護衛船、補給船などがつく。あまりのものものしさに、朝鮮側の通訳が、ジョークを言ったことが、記録されている。

「日朝両国の船団あわせれば、海外の諸蛮を討つことができる。足りないのは、武器だけだろう」

朝鮮使は、上関へ着く。熊毛半島の先端にある港である。ここで饗応が行なわれ、そこから先は、安芸広島藩の負担になる。

矢吹は、自分の故郷の長州と、古から深い関係のある朝鮮について、自分が漠然としか知らないことを、はじめて知った。事実、上海の租界にいると、欧米人から、朝鮮について、訊かれることが多い。かれらの目で見ると、中国人、朝鮮人、日本人は、同じように見えるらしい。イギリス人がフランスについて知っているのと、同じ程度の知識を、朝鮮に関して日本人に期待するのである。

だが、現実には、矢吹は、この隣国のことを、なにも知らないに等しい。記憶に残っていることといえば、長州戦争のときの高杉晋作のジョークくらいのものである。もし、幕府との戦いに敗れたら、藩主をかついで朝鮮へ逃げ、捲土重来を期すというのである。

矢吹が、そんなことを考えているあいだに、チャイナ号は、湾内に入っていった。深い水をたたえた湾は、奥深く続いている。周囲は、緑の大地が織りなす景致にとりかこまれている。予想どおり、京師から遠くはずれた鄙びた湾内には、軍船の姿は見当たらなかった。さきほど海岸にみえた里人の

身振りからも、この近くの住民が、さほど敵意を持っていないことを知ることができる。

チャイナ号は、グレタ号を牽引したまま、さらに湾内を進んだ。舳のほうでは、オッペルト隊長、フェロン神父、メラー船長などが、総立ちになって、声高に叫びたてている。

行手に小さな島が見える。牙山湾のなかの行担島という小島である。

チャイナ号の甲板で、水夫の動きが、あわただしくなった。

「機関停止」

号令とともに、水夫が走り、ウインチを操作する。ガラガラという鎖の音とともに、錨が投げこまれる。

大小二隻の船は、行担島ちかくに投錨し、そこで一夜を明かすことになった。

時に一八六八年――明治元年四月十七日のことであった。ここに到るまで、船は薪水の供給を受けるため、長崎に寄港している。矢吹は、そのとき、咎めを受けることを恐れて、甲板にも姿を現わさなかった。

だが、そのころ、日本は、明治維新――戊辰戦争の渦中にあり、東北諸藩の帰趨は定かではなかったが、徳川家十五代の都江戸は、すでに、薩摩・長州兵によって、無血占領されていた。

2

その夜、チャイナ号の船長室では、会議が持たれた。矢吹兵馬も、立会人のような立場で、その席

に加わった。

矢吹は、朝鮮人、中国人から、さまざまな情報を仕入れている。欧米人は、この武士を、日本刀の使い手として、朝鮮人にあたらせることを考えている。夷をもって夷を制すという方針は、中国人の専売特許ではない。欧米人もまた、君臨すれども統治せずの方針で、インド人をインド人に、中国人を中国人にあたらせるように努めている。アジア人にアジア人を殺させるのが、得策なのである。

矢吹は、日本刀のおかげで、かれらからも、一目おかれているため、会議に出ることを許されたらしい。

席に連なる欧米人も、また国籍を異にしている。

隊長のエルネスト・オッペルトは、北ドイツ連邦の出身で、強いドイツ訛りの英語を話す。この男の言葉は、母音をはっきり発音してくれるので、矢吹にも聴きとりやすかった。

オッペルトは、すでに二度、朝鮮に来ている。一度目は、上海から牛荘へ向かう貨物船ロタ号に、五日間だけ寄港してもらい、漢江附近を探っている。二度目は、エンペラー号をチャーターし、フェロン神父に頼まれて、朝鮮に残留しているリデル神父の隠れ家を探し、連絡をとるためである。このとき、かれは、朝鮮官吏と接触しているが、当のリデル神父は、中国の芝罘へ脱出したあとであった。

二回目の遠征のとき、オッペルトは、エンペラー号に、九ポンド砲を装備している。帝国主義と宣教師の連繋プレイを演ずる気があったようであるが、このときも不発に終っている。

フランス人の耶蘇会士フェロン神父は、大院君を怨んでいる。この陰険な小男は、耶蘇教をもって、十字軍を組織するようなつもりでいるらしい。東アジアにおける耶蘇教のもつ、植民地主義の尖兵と

しての役割は、誰がなんと言おうと、否定できない。宣教師虐殺、即武力行使というステップは、アジア・アフリカにおける常套的な侵略のパターンである。

朝鮮の大院君は、宣教師の役割を見抜いていた。一八〇一年の辛酉教難、一八三九年の己亥教難、一八六八年の丙寅教難など、何度も耶蘇教弾圧を試みている。

フェロン神父は、かれを追放した大院君に対する復讐の念に燃えている。それに、異教徒を教化するという、火のような使命観が加わるから、神の名においては、いかなることも許されると、狂信しきっている。

船長のメラーは、実直そうなイギリス人である。この航海にただ雇われているだけであり、オッペルトの方針に従うだけの存在である。

席につらなる人々のなかに、ジェンキンスというアメリカ人がいる。上海のアメリカ副領事セワードの友人であり、この遠征のスポンサーである。

「ところで、目的地は、まだ遠いのか？」

ジェンキンスが訊いた。この遠征には、大金を注ぎこんでいる。しかし、計画の立案者は、オッペルトとフェロン神父である。

「これからの行程については、フェロン神父から説明があります」

オッペルトは、説明役を神父に譲った。

「プリンス・ジェローム湾の奥は、二つの入江に分かれています。南側の入江が行きどまりになるあたりで、チャイナ号を碇泊させます。小型のグレタ号に乗りかえ、插橋川という河を遡ります。ほ

ぼ三十マイル行ったところで上陸します」

「そこから、目的地までは？」

ジェンキンスが、勢いこんで訊いた。いよいよ話が、問題の核心に触れてきた。

「徒歩で約四時間、途中ひとつの大きな町を通ります。ここには、朝鮮の軍隊は駐屯していませんが、住民との摩擦は避けられないでしょう」

「その点は、構うまい。抵抗すれば、銃で射殺する。サムライにも、働いてもらうことになる」

オッペルトは、平然と答えた。なにが構わないのか、よく判らない。他国の領土を侵犯して、住民を射殺するというのである。

「問題は、その廟所だろう。納骨堂に入りこむ時間を、見込んでおくべきだろう」

「大院君の父親の墓です。金銀財宝も埋めてあるにちがいない。これは、楽しみなことだ」

欧米人は、わいわい騒ぎはじめた。

この計画の発案者は、フェロン神父である。插橋川の西、温泉で有名な徳山の近くに、伽倻山という低い山がある。その山麓に、大院君の父親の南延君の墓所がある。神父の復讐は、この墓所を発いて、南延君の遺骨を質にとることを目的としている。

「迷信ぶかい朝鮮人のことです。驚きあわてることでしょう」

「その骨を切札に使えば、朝鮮も開国しないわけには行くまい。もし嫌だといえば、父親の骨は、穢されることになる。小便でもかけてやると言えば……、わはははは」

オッペルトは、豪快な笑い声をあげた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.